

令和3年度 府中市立府中第六中学校学校経営報告書

府中市立府中第六中学校
校長 相馬 朋行

今年度の取組目標

(1) 教育活動の目標と方策

○学習指導

- ①持続可能な社会づくりの担い手として自ら課題を解決する資質・能力の育成を念頭に置き、「主体的・対話的で深い学び」・「振り返りと見直し」を活用した授業を展開し、生徒の学力の向上を図る。
- ②習得・活用・探求という学びを進める上で、各教科の見方・考え方を豊かにする授業改善を図る。
- ③家庭学習の課題の効果的な提示を図り、基礎学力を充実させ、各調査における市、都、全国平均を超え、学年による不得意分野の克服を目指す。
- ④校内研修を通じ、新学習指導要領に関する研修を深め、年間3回の授業研究を行い、授業改善を促進する。
- ⑤小中連携の日の活用と小中連携の行事の推進を行い、地域小学校と目指す生徒像の「主体的に学習し、学び合う児童・生徒」を共有し、「学び」の視点から9年間を見据えた小中連携一貫教育の教育活動を推進する。
- ⑥特別支援教育の理解とユニバーサルデザインの視点による授業研究をもとに、特別な支援が必要な生徒の共通理解を進め、個に応じた指導と具体的支援を行う。
- ⑦数学習熟度別少人数授業、英語習熟度別少人数授業を通じて生徒一人一人の特性を理解し、指導内容を工夫し学力向上を図る。

1時間の授業を通して何について学び、どのような力を身に付けることができたかを生徒自身が明確に捉えられるためには、主体的・対話的で深い学びとなる内容を計画的に授業に取り入れる必要がある。さらに、身に付いたことを定着させるために随時、振り返りの機会をもち、見直しを立てた授業展開を行わなければならない。また、家庭学習との連動により、授業内容の一層の定着と発展的な内容へのステップアップを図る必要がある。4月に行われた府中市の学力テストでは、市の平均点に対し、国語は0.5ポイント下回り、数学は2.8ポイント下回った。また、5月に行われた全国学力・学習状況調査では、国語は全国の平均点に対し6.4ポイント、都の平均点に対し4ポイント上回った。数学は全国の平均点に対し10.8ポイント、都の平均点に対し8ポイント上回った。今後もさらに主体的・対話的で深い学びを実践し、各教科における見方・考え方を豊かにする授業改善を行っていく。

特別支援教育に配慮した授業展開を計画的に行い、各生徒の実態に即して個別指導を充実させ、学習に対して集中して取り組む姿勢を養うことができた。少人数授業においても習熟度に応じた授業を展開し、個々のつまずきの解消を図ることができた。

○生活指導・進路指導

- ①府中六中スローガン「信頼と思いやり」をもとに、他人を思いやる気持ちと自己有用感を育て、

学校生活の学校評価における肯定的評価 90%以上を目指す。

- ②「学校いじめ防止基本方針」をもとに、毎月アンケートを実施し、いじめ、問題行動の早期発見と問題の解決にあたり、いじめ・暴力への指導、並びに生徒の悩みへの対応に対する肯定的評価 90%を継続する。
- ③あいさつ・礼への意識を高め、朝礼の黙礼などを奨励し、あいさつの肯定的評価 95%を目指す。
- ④毎週特別支援校内委員会を実施し、支援の方策を具体的に進めると共に、不登校対策を進める。
- ⑤進路指導部を中心に、進路指導体制の充実を図り、全校体制で適切な進路指導を推進する。
- ⑥不登校生徒への援助を丁寧に行い、保護者や外部との情報交換や連携を適切に行い、昨年度比 10%減を目指す。

スローガン「信頼と思いやり」の達成に向けて学校全体で取り組んだ。周りの仲間たちに対して思いやりの気持ちをもって接しているかという質問に対する生徒アンケートの肯定的評価は 90.1%で、目標は達成できたと言える。

「学校いじめ防止基本方針」に基づき、いじめに対する早期発見、早期解決を目指した。学校にいじめや暴力などが無いように教員は熱心に指導しているかという質問に対する生徒アンケートの肯定的評価は 92.5%で、目標は達成できたと言える。しかしながら、いじめを未然に防ぐことは必ずしもできたとはいえない。日頃から生徒の様子観察を徹底し、いじめ撲滅を実現する。

生徒が自主的にあいさつするという習慣は本校の伝統である。あいさつをきちんとしているかという質問に対する生徒アンケートの肯定的評価は 91.4%で、達成できたと言える。コロナ禍のため、地域の方などに接する機会は少なくなったが、伝統は継承されていると言ってよい。

不登校生徒については各家庭と連絡を取り、保護者や生徒本人の不安の解消に向けて努力してきた。しかし、不登校生徒出現率は昨年度比 10%減を達成することができなかった。今後は一層家庭と連絡を密に取りつつオンライン授業配信を計画的に行い、不登校生徒の出現率を減らしていく。

進路指導では、3年間を見通した内容に取り組んだ。とくに、集大成となる3年生の進路指導では年間指導計画に基づいて実施し、成果を上げた。

○特別活動

- ①体育的・文化的行事における生徒の主体的な活動を進め、行事に対する仲間との協力や積極性の肯定的な評価 90%を目指す。
- ②機会あるごとに、地域ボランティア活動に対する意識を高めていく。オリンピック・パラリンピック教育の視点、ボランティアへの参加意欲、生徒の延べ参加人数の総数、ともに肯定的評価 65%を目指す。
- ③生徒会役員会を中心とし、生徒の委員会活動の活性化、充実を図り、委員会、係活動の積極性に対する肯定的評価 90%を目指す。
- ④委員会や活動を通じてあいさつや規範意識の向上に努めるとともに、主体的に活動を進めることで「信頼と思いやり」を育てる豊かな心の教育を進める。
- ⑤音楽の授業、朝礼、学校行事等を通じ校歌を始めとした合唱指導を充実させ、愛校心を育て自己肯定感を高める。

今年度は体育大会、合唱コンクールを実施することができた。行事に対して仲間と協力し自分から積極的に取り組んでいるかという質問に対する生徒アンケートの肯定的評価は 87.3%で、目標を下回った。コロナ禍において生徒の意欲を向上させ、積極的に行事に取り組ませるための方策を講じ、生徒に達成感を抱かせるようにする。

生徒会役員の活動を指導しつつ、委員会活動や係活動が充実するよう支援した。委員会活動や係活動に積極的に取り組み自分の責任を果たしているかという質問に対する生徒アンケートの肯定的評価は89.9%で、目標はおおむね達成できたと言える。

学校行事全般については、コロナ禍のために十分な取り組みができなかった。学習指導要領における「全校又は学年の生徒で協力し、よりよい学校生活を築くための体験的な活動を通して、集団への帰属感連帯感を深め、公共の精神を養いながら、資質・向上を育成することを目指す」という目標は達成できなかった。とくに、1、2年生で計画していた鎌倉校外学習が実施できなかったことは残念であった。

○学校運営・その他

- ①3人の主幹教諭、さらに、主任教諭を通じて組織的なOJTを進め、特に若手教員の人材育成を図り、校内の組織的運営を充実させる。
- ②学校だよりの発行、地域や小学校への配布、毎月の学校公開の実施を通じ保護者、地域の理解を深めるとともに、保護者、地域と協働して生徒を育てる意識を高める。
- ③学期の始めや終わりの服務研修と共に、朝の打ち合わせや職員連絡会などを通じ、時期を逃さず、服務の厳正について指導し、服務事故を0にする。
- ④スクールコミュニティ協議会を中心として、地域とともに育てる生徒の視点を重視した教育活動を展開する。
- ⑤オリンピック・パラリンピック教育を推進し、ボランティアマインドの育成とスポーツ志向の向上に努める。
- ⑥副校長等校務改善支援員を活用し校務改善を図り、あらゆる面で生徒の教育活動の円滑な実施を進めるとともに働き方改革を進める。
- ⑦T-コンパス出退勤システムを活用した勤務時間の管理や業務の効率化の呼びかけを通じ、週当たりの在校時間60時間を超える教員ゼロを目指し、校務改善を進め、働き方改革を進める。
- ⑧小中連携・一貫の日を活用し、カリキュラムの工夫や生活指導上の連携を進め、「六中学区教育を語る会」を通じ、地域活動の連携を進める。

3人の主幹教諭を教務、進路指導、3学年主任に配置し、相互に連携させながら学校経営の基盤を築いた。さらに、生活指導主任及び1学年主任をそれぞれ主任教諭から任命し、5人による人材育成ラインを形成し、組織的にOJTによる人材育成を図った。若手教員も教科指導や生活指導・進路指導について中堅・ベテラン教員に積極的に質問・相談し、組織力の向上につなげることができた。

学校だよりではその時々の時勢を反映した内容や生徒に考えさせる題材を設定し、広い視野で身近な人や世の中の現象を考察できるよう工夫した。生徒の活躍する姿を掲載することで、学校での取組について保護者や近隣小学校に周知できた。

学校公開はコロナウイルス感染症防止の観点から十分に行うことができなかった。開かれた教育課程を実践するために動画配信できる環境を整え、実践していくようにする。

オリンピック・パラリンピックの観戦を推進し、スポーツに関する関心を高めたりボランティアマインドを養ったりすることができた。

副校長等校務改善支援員を有効に活用し、校務の改善を進めることができた。また、諸帳簿の管理体制を整え、機密文書の徹底管理を推進し、業務の簡便化にもつなげることができた。

勤務時間の管理体制が定着し、各教員が自己の業務を自主的に管理できるようになり、働き方改革が実践できた。体調を崩す教員も少なかった。

(2) 重点目標と方策

府中六中スローガン「信頼と思いやり」をもとに、生徒同士の信頼、生徒と教員の信頼、地域からの信頼、保護者からの信頼を醸成するとともに、あらゆる教育活動の中で他人を思いやる気持ちを育む。その「信頼と思いやり」を土台に「確かな学力と豊かな心」「健康な身体と強い意志」「前向きな姿勢と責任感」を育てる。重点目標として以下の点を上げる。

①生徒の自己肯定感の育成、自ら学習に取り組む姿勢の育成を通じた確かな学力を身につける学習指導の推進

- ・授業の「本時のねらい」と「本時のまとめ」を明示することを共通実践として、わかりやすい授業を目指す。
- ・「主体的・対話的で深い学び」・「振り返りと見通し」の活用を通して、生徒の主体的取り組みや課題解決の場면을重視した授業の展開を重視し、研究授業で研鑽する。
- ・習得・活用・探求という学びの中で、各教科の見方・考え方を働かせることを意識した授業展開を工夫する。
- ・ICTやホワイトボード、生徒一人一人用のタブレットを効果的に活用した授業を通じ、「学びに火をつける」効果的な課題提示により生徒の意欲向上や学びの深化を図る。
- ・指導と評価の一体化を進め、適正な評価を行い意欲的に授業に取り組む生徒を育てる。
- ・各支援員を活用し、数学の基礎学力の向上を図ると共に、図書室、学級文庫の充実を図り、読書に親しむ生徒を育てる。
- ・英語の少人数授業の中で、英語への苦手意識をなくし、オリンピック・パラリンピック教育を進める。

ICT機器を活用する授業が増え、授業の内容が視覚的に捉えやすくなり、生徒の興味関心を引き出すことができた。コロナウイルスによる学年閉鎖をきっかけとしてオンライン授業の配信を開始し、出席停止や不登校による欠席生徒が自宅でタブレットを使用する頻度が増した。

10月から12月までは感染症防止対策を講じつつ、主体的・対話的で深い学びを実践した。コロナ禍においては音楽科、保健体育科、家庭科などで授業内容の制約があり、十分な教育活動が行われたとは言えないが、教師主導による分かりやすい授業展開で知識・理解の定着を図った。

新学習指導要領の全面実施に伴って指導と評価の一体化を図り、適切な評価を実践した。

②学校の組織的運営と教職員の研修の充実を通じた学校経営体制の確立

- ・毎朝の主幹会・週一回の運営委員会・月一回の職員連絡会とともに学年会・分掌部会の組織的運営を図る。
- ・生活指導部会、教務部会、進路指導部会の時間割内への設定を行い、定期的に情報交換を行い、課題解決に向け組織的にあたる。
- ・生徒一人一人へのタブレット導入に向けた研修2回を含めて年間7回の研修会を実施し、授業改善、適正な評価、特別支援教育の理解とその充実を進め、学校経営への参画意識を向上させる。
- ・起案決裁システムの徹底により業務の効率化や人権意識の向上を図り、組織的運営を促進する。
- ・学期始めと終わりの服務研修の充実と日常の服務に関する研修・講話を通じ、教職員の服務に関する意識の向上を図ると共に、服務事故0を達成する。
- ・副校長の下に、経営支援組織を確立し、経営支援会議を定期的に関き、組織的運営を進め、教育

活動の円滑な推進を図る。

- ・副校長等校務改善支援員を活用し、教員の働き方改革を進める。

運営委員会を学校経営の中核として位置付け毎週火曜日に開催し、職員連絡会で提案される議題の内容を精選・整理したり、中長期的な教育課題の解決に向けて検討したりした。

毎朝の主幹会では一日の流れや留意事項を確認しているが、コロナウイルス感染症拡大防止に伴うまん延防止等重点措置が適用されてからは必要に応じて放課後等に緊急開催し、喫緊の課題について解決策を検討するとともに全教職員への周知を図った。

校内研修会ではICT機器の活用方法、特別活動を通して自尊感情を高める実践例、特別支援教育の理解と充実などについて、現在の学校が求められている最先端の教育について研修し、日常の教育活動に還元することができた。

文書起案を決済する流れはすでに確立されている。この流れによって文書における誤字脱字等がほぼなくなった。

服務事故防止のため、学期初めと学期終わりに服務に関する研修会を開催し、処分内容を付記することで一層の注意喚起を行った。

③学校特別支援教育、合理的配慮、不登校生徒への理解と実践

- ・週一回の特別支援校内委員会を中心に、特別な配慮を必要とする生徒について特別支援コーディネーター、養護教諭、スクールカウンセラーと共に支援の具体的方法を検討し、適切な指導を進める。
- ・特別支援教室拠点校として各中学校との連携を深め、特別支援教室での指導及び巡回指導の充実を図ると共に、研修会を通じて特別支援教育へのさらなる理解を深めると共に、ユニバーサルデザインの視点による環境整備など、具体的な学習環境改善、授業実践を行う。
- ・各学年の不登校生徒の情報交換を進めると共に、保護者・外部機関と連携した適切な支援を行い、登校へのきっかけを見つけ、不登校の解消を図る。
- ・スーパーバイザー、巡回相談を積極的に活用し、生徒一人一人に合った支援体制を整え、適切な支援を行う。

2学期途中から特別支援教育校内委員会を特別支援教育を中心とした委員会に特化させ、特別支援教室の拠点校として特質を生かし、各生徒の課題の解決に向けてスモールステップの目標を設定し、特別支援教育の充実を目指した。

同様に、2学期途中から生活指導部会にスクールカウンセラーを参加させ、不登校生徒への具体的な効果的な対応策を講じることができるようにした。SSWにも参加してもらう機会をもち、不登校生徒の家庭での様子なども共有することができた。図書室への別室登校も生活指導部員で監督する時間帯を分担し、不登校傾向の生徒が登校しやすいように環境を整えた。

④道徳授業の充実を通じた自己肯定感と豊かな心の醸成

- ・道徳授業推進教師、学年の道徳担当教員を中心に道徳授業の充実を図り、豊かな心の醸成をはかる。
- ・道徳授業を中心とした教育活動全般を通じ、自己肯定感の向上を図ると共に愛校心を育てる。
- ・特別の教科道徳について、「考える道徳」・「議論する道徳」の授業に向けて、さらなる指導方法の工夫、改善をし、人間としての生き方について考えを深め、多様な価値観を共有できる豊かな心を持った生徒を育てる。

- ・特別な教科道徳について評価方法の共有化を図り、適切な評価を行う。
- ・あいさつ・ボランティア・合唱を通じた自己肯定感の向上とそれらを生かした魅力ある学校づくりを進める。

道徳教育推進教師と学年の道徳授業担当教員が協働で作成した年間指導計画に基づき、考え、議論する道徳の授業を実践した。10月には家族愛をテーマに道徳授業地区公開授業を開催し、教員、保護者、地域住民で協議をしたり、3月には元オリンピックを講師として招いて特別授業を行ったりするなど、道徳の授業や協議を充実させることができた。

⑤地域、保護者との連携を通じた学校支援体制の充実

- ・生徒、教員の地域ボランティア活動への参加を通じ、地域と協働して、地域の担い手としての意識を育てるとともに、学びに向かう力・人間性の涵養を図る。
- ・「ふるさと学習」を念頭に、くらやみ祭り、どんど焼きにボランティアとして参加し、地域の歴史、伝統を学び、ふるさと府中を愛する心を育てる。
- ・コミュニティ・スクールの充実を図ると共に、地域ボランティア活動などの連携を通じ、学校への支援体制の充実を図る。
- ・「六中学区教育の日」などを通じ、小中連携・一貫の体制を強め、地域との連携を深める。

緊急事態宣言やまん延防止等重点措置の適用がなかった11月と12月に行われた地域行事には、それぞれ28名、42名の生徒がボランティアとして参加した。また、12月には近隣小学校の児童会役員と本校の生徒役員による交流会を企画し、持続可能な社会づくりをテーマに協議した。